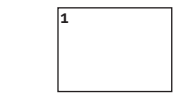


# サイレント時代の喜劇



- サイレント映画の伝説的瞬間——ハロルド・ロイドが『要心無用』で街路上空の時計盤からいきなりぶら下がる。
- 『キッド』で詐欺師コンビを演じるチャールズ・チャップリンとジャッキー・クーガン。
- 『曲馬団のサリー』のポスター。ユースタンス・マッガーグル教授を演じるW・C・フィールズが描かれている。

サイレント時代の喜劇は、チャールズ・チャップリン(1889–1977)やバスター・キートン(1895–1966)など、その「黄金時代」に活躍したスターたちに絡めて語られることが多いが、実際には映画史のごく初期から存在する、人気の高いジャンルだった。映画発祥の時代から数多くの作品が、場面切り替えなしの視覚ギャグを展開した。たとえばルイ・リュミエール(1864–1948)監督作『水をかけられた散水夫』(1895)では、庭師が水撒き用ホースのせいで何度も災難に見舞われる。これら初期の実験的作品は大いに成功したが、サイレント時代に高い人気を誇った多くの俳優たちは、今ではほとんど忘れ去られているか、チャップリンやキートンの陰に隠れてしまっている。『要心無用』(1923、上)におけるハロルド・ロイドの無謀な演技や、『南北珍雄腕比べ』(1926)のレイモンド・グリフィスなどは、よくできた定番ギャグの典型例である一方で、ジャンルを代表する俳優であっても徐々に世間から忘れられてしまう現実を思い出させる。

サイレント時代初期、ヨーロッパでは、人を笑わせる芸が論理的展開と型を備え始め、1920年代にはこの分野で早くから活躍していたアンドレ・ディードや、特に人気の高かったマックス・ランデーなどの喜劇俳優によって広まっ

ていった。しかし、後にサイレント喜劇の定義となる表現を生み出したのは、マック・セネットのキーストン・スタジオ社であった。1912年設立の同社は、コメディアン集団「キーストン・コップス」に観客の喜ぶものを演じさせるという形で、産業規模の喜劇映画を制作し始めた。「コップス」ものはほんの数日で制作されることが多く、ドタバタの追跡シーンの連続で成り立っており、びっくりするようなスタントが盛り込まれ、大小さまざまな体軀のアンバランスな俳優たちが登場する。セネットは、一連の視覚ギャグ、現実離れたシナリオ、個性的な外見を持つ性格俳優たちを頼みとした、画面上で見る喜劇の一形式を作り上げるのに重要な役割を果たした。キーストン社の映画は短命で、その時々話題をテーマにしたものや、有名な映画の猿まねをした短編映画が毎週何本も新しく作られた。ハリウッド初の喜劇スター俳優を育て上げたのもセネットその人で、マック・スウェイン、フォード・スターリング、メイベル・ノーマンド、ロスコー・「デブ君」・アーバックル、ハリー・ラングドン、チャールズ・チャップリンなどは、いずれもキーストン社の映画で有名になった。

チャップリンはキーストン社の代わり映えのしないドタバタ喜劇からの脱出を図り、同時代の傑出した喜劇俳優となり、ついには週給1250米ドルを要求するほどのスターになった。『黄金狂時代』(1925、→p.64)はサイレント時代に最高レベルの売上を達成した作品で、『キッド』(1921、右上)同様、常に彼の頭から離れないテーマの数々を掘り下げた作品である。なかでも貧しさの与える影響というテーマは、貧しい環境に育ったチャップリン自身の背景と響き合う。

キートンは元子役であり、アクロバットやヴォードヴィルで活躍していた。その笑いは無表情な顔と、馬鹿馬鹿しいほどに優れた運動神経を発揮する様子とのコントラストから引き出されるもので、チャップリンの笑いとは異なっていた。キートンのおかげで、体を張っての喜劇は詩的とも言える高みに至った。大がかりであればあるほど危険な、複雑化する一方の舞台装置の中で、考え抜かれた巧みな演技を見せることで成し遂げられたのだ。

トーキーの到来は多くのサイレント喜劇俳優のキャリアをがらりと変えてしまった。チャップリンは1940年の『独裁者』まで台詞を用いることを拒み、『モダン・タイムス』(1936)のように効果音を使う方を好んだ。キートンは台詞主体の喜劇に馴染めず、ハロルド・ロイドやハリー・ラングドンなどは、彼らの面白さに備わっていた熱気や魅力の大半を失った。一方W・C・フィールズは舞台俳優時代に当意即妙のやりとりを呼び物としていたため、サイレントでは『曲馬団のサリー』(1925、右)をはじめとする複数の作品をヒットさせ、トーキーでは『ザ・バンク・ディック』(1940)などで成功を取めるというように、時代の境目を上首尾に渡り切ることができた。RH



## ■ 主な出来事

1909	1910	1912	1914	1915	1917	1919	1921	1923	1925	1926	1936
ロスコー・「デブ君」・アーバックルが短編コメディ『ベンズ・キッド』で俳優デビューを飾る。	チャップリンがフレッド・カーノー劇団とともに初のアメリカ巡業を行う。後に再度アメリカの地を踏み、マック・セネットと契約を結ぶ。	マック・セネットがカリフォルニア州エデンデールにキーストン・ピクチャーズを設立する。サイレント喜劇を産業規模で展開する。	チャップリンの「放浪者(トランプ)」が『ヴェニスの子供自動車競走』で銀幕デビューを飾る。	W・C・フィールズが『ブルー・シャークス』で脚本・主演を手がける。これが彼の俳優・脚本家としてのデビュー作となり、時代の「終わりの始まり」を予感させる。	マック・セネットがキーストン・ピクチャーズを去り、新たに会社を設立する。サイレント期における「ウッドスター」数名とともにユナイテッド・アーティスツ社を設立する。	俳優たちがこれまで以上に芸術面に関して主導権を握れるようにと、チャップリンが他のハリウッドスター数名とともにユナイテッド・アーティスツ社を設立する。	ヴァージニア・ラッペとの醜聞が引き金となり、「デブ君」・アーバックルは瞬間に仕事を失っていく。	ハロルド・ロイド主演、ハル・ローチ制作の『要心無用』が公開される。	チャップリンが『黄金狂時代』(→p.64)を公開する。彼の作品中最も成功した伝説的作品となり、サイレント映画の中でも最高レベルの興行収入を上げている。	キートンが『キートンの大列車追跡』(→p.66)の制作を終える。当初は酷評されたが後に再評価され、サイレント時代の最高傑作の一つとして受け入れられる。	世界初のトーキー作品から10年近くを経て、チャップリンが彼にとっての初トーキー作品『モダン・タイムス』を公開する。本作に入っている音声は効果音のみである。